

防災・減災のページ

毎月11日掲載

第72回 高知新聞社と共催 @高知・安芸

むすび塾

震災後に整備された避難路は街灯が少なく、ほぼ真っ暗。参加者は懐中電灯の明かりを頼りに、段差や側溝、水たまりに注意しながら15分ほど歩いて指定避難所の保育所に着いた。

夜間訓練は、住民が震災を機に津波への危機意識を高め、2011年7月に始めた。隔月開催で38回目となった今回は、むすび塾に合わせて市内他地区の自主防災組織役員らがオプザーバーとして初めて加わった。

訓練を運営する伊尾木小PTA会長の安岡豊さん(54)は「市自主防災組織連絡協議会会長は、訓練しないといきょう時に逃げられない。2カ月に1回実施することで、懐

2カ月に1度 避難確認

市役所に津波6.5メートル想定

高知県安芸市は土佐湾に面し、人口約1万7000人が住む。1時間後に高さ30メートルの津波が到達し、1時間40分後に最大6.5メートルに達する。道路沿いなどに10基建設。ハード整備が進む一方、1946年の昭和南海地震以来、地震や津波の経験が乏しい。対策として、高台に通じ



高さ20メートルの津波避難タワーに向かう避難路。10月28日午後8時40分ごろ、高知県安芸市伊尾木

とんどなく「住民の危機意識が弱い(市危機管理課)現状にある」という。住宅地や学校などが海沿いに立地するが、津波避難訓練を続ける伊尾木地区を除けば目立った取り組みはなく、ソフト面の対策強化が課題となっている。



周辺地域に成果波及を

NPO高知市民会議理事 山崎水紀夫さん(53)

安芸市は1000年に1度津波でも鉄筋3階以上の建物で逃げられるまでになっている。同様の取り組みが周辺の地域にも波及していけばいい。

災害時には逃げようとしていて犠牲になる住民も出てくる。災害が起きてからの説得は危険が伴う。普段から「あなただけ逃げる」という人が犠牲になる」と伝え続けることが大切だ。

南海トラフに備え夜間訓練

避難訓練は安芸市東部の伊尾木地区で28日午後7時にスタートした。台風22号の接近で大粒の雨が降る中、住民ら約50人が参加。15分の大津波を想定し、海岸から約300メートルにある伊尾木公民館から海抜約20メートルの伊尾木保育所を目指した。

震災後に整備された避難路は街灯が少なく、ほぼ真っ暗。参加者は懐中電灯の明かりを頼りに、段差や側溝、水たまりに注意しながら15分ほど歩いて指定避難所の保育所に着いた。

夜間訓練は、住民が震災を機に津波への危機意識を高め、2011年7月に始めた。隔月開催で38回目となった今回は、むすび塾に合わせて市内他地区の自主防災組織役員らがオプザーバーとして初めて加わった。

訓練を運営する伊尾木小PTA会長の安岡豊さん(54)は「市自主防災組織連絡協議会会長は、訓練しないといきょう時に逃げられない。2カ月に1回実施することで、懐

中電灯の電池切れや避難路の草刈りの必要性なども把握できると語った。

参加者は、公民館近くに完成したばかりの津波避難タワーの避難も体験。階段とスロープを上り、数分で海抜約22メートルの最上階に着いた。西ノ島地区自主防災会副会



保育所への夜間避難訓練で、避難する際の留意点を説明する安岡さん(右)。10月28日午後7時15分ごろ、高知県安芸市伊尾木

河北新報社は10月28、29の両日、高知新聞社と共催し、通算72回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を高知県安芸市で開いた。南海トラフ巨大地震を想定。夜間の津波避難訓練を実施した後、住民らが東日本大震災や熊本地震の経験者と共に訓練の成果や課題を語り合い、地域連携を強めて備えの意識を高める大切さを確かめた。

伊尾木地区の家事手伝い陰山直子さん(49)は「避難路は道幅が狭い上に足元も見にくい。障害者の自力避難は難しい。地区外の人など避難路をよく知らない人を誘導する看板も必要」と指摘した。

河北新報社は14年から全国の地方紙と連携してむすび塾を開き、今回が10回目。高知新聞社との共催は16年2月以來2回目となる。前回のむすび塾後に同社は同様のワークショップ「いのく(生き延びる)の方言塾」を始め、今回は5回目のいのく塾として開いた。

伊尾木地区の夜間避難訓練が連日、季節によっては避難路にマムシも出るという。状況に応じた避難の仕方について、自然に理解できる。

震災では、過去の津波犠牲者を用いている地域で、犠牲者が少なかった。そうした経験や習慣がない地域で防災意識を醸成するのは難しい。夏と冬では避難時の服装

状況に応じた避難体得

東北大災害科学国際研究所准教授(災害情報学) 佐藤 翔輔さん(35)

伊尾木地区の夜間避難訓練が連日、季節によっては避難路にマムシも出るという。状況に応じた避難の仕方について、自然に理解できる。

震災では、過去の津波犠牲者を用いている地域で、犠牲者が少なかった。そうした経験や習慣がない地域で防災意識を醸成するのは難しい。夏と冬では避難時の服装

【災害に備えて】津波に備えて夜間訓練を重ねてきた。高台と避難路があり、家を出られれば大丈夫という手応えもある。ただ、地震の強い揺れで家の外に出られるかどうか不安。揺れ対策をしないとけないが、できていないのが現実だ。安芸市自主防災組織連絡協議会会長・安岡豊さん(54)



【参加して】知っていることで、できることは違っても感じた。避難訓練は体だけでなく、心で覚えるように繰り返したい。災害で犠牲者を出さないため、地域の人に「あなたのこと大切で、守りたい」と伝え、自分の命を守る方向に意識付けたい。安芸市自主防災組織連絡協議会女性部会長・仙頭ゆかりさん(59)

【災害に備えて】住まいは海岸から離れているので津波は来ない。家の倒壊に備えなければいけないと考えていたが、内陸部の住民は津波で被災した沿岸部の住民の支援をしなければいけないということに気が付かされた。自分たちに何が出来るかを考えたい。一ノ宮地区自主防災会会長・川上信さん(66)

【参加して】語り部の震災体験が身にしみて伝わった。地元の防災の現状には反省もあるが、津波避難タワーへの避難訓練などヒントを得た。強い揺れの後にどう対処すべきか不安もある。災害時の環境を乗り越えるため、地域で話し合う機会をつくらせたい。安芸中央自主防災会会長・松本健さん(58)

【参加して】語り部の志野さんの話は年齢が近いこともあり、特に心に響いた。早速、家族で「津波の時はおのおのが避難する」と確めた。伊尾木地区の訓練に参加したのは初めて。多くの人が参加していて、すごいと思った。今後は友達も誘い、備えの意識を広めたい。安芸桜ヶ丘高2年・山田沙姫さん(16)

【災害に備えて】わが子には常に「今地震が起きたらどうする」と問い掛け、瞬時に判断できるように努めている。市中部は住民同士の関係が希薄で、一体感を持った訓練が難しいのが実情。参加が少なくてもいいと割り切り、まずはできることから始めたい。安芸市安芸一小PTA副会長・藤崎至誠さん(39)

【参加して】津波からの避難、訓練を重ねることの重要性を切実に感じた。沿岸部の被災者を地元の内陸部の住民が支援するなど、実際に津波が起きた後は広域連携が大切になることも分かった。自分の住む地域でも防災の取り組みを進展させたい。西ノ島地区自主防災会副会長・山崎均さん(58)

【災害に備えて】地震、津波による火災対策や家の耐震化を進める必要がある。地域防災を推進するには「コミュニケーション」が重要で、次世代を担う若者たちへの教育も欠かせない。備える意識の大切さを子どもたちに伝えていきたい。安芸市消防署員、川向地区自主防災会会長・山崎均さん(58)

高知・安芸